膵細胞診における酸性粘液多糖類アルシアン緑染色の有用性

◎海谷 瑠美[1)]、居鶴 一彦[1)]、夛田 耕一[1)]、矢矧 みどり[1)]、長岡 純二[1)]
山形市立病院 済生館[1)]

【はじめに】膵癌は早期診断が重要である.今回我々は,膵管の粘液産生能に着目し,酸性粘液多糖類アルシアン緑(Al-G)染色の有用性について検討したので報告する.

【方法】EUS-FNA 組織診断悪性(腺癌)33 例,良性 11 例の細胞診検体を対象とし, Al-G 染色態度について集塊を,びまん性,不均等分布,部分分布,辺縁,陰性の 5 項目,孤在細胞を,貯留,顆粒状,網状,細胞質内小腺腔(ICL),外分泌,細胞質内不均等,辺縁,陰性の 8 項目に分類し,染色態度の発現症例の割合を良悪性で比較検討した.

また, ERCP 細胞診 24 例中,組織診あるいは臨床診断悪性 17 例を対象に, Al-G 染色併用の有無での感度を比較検討した.

【結果】集塊の染色態度の割合(悪性%,良性%)は,びまん性(42%,36%),不均等分布(76%,9%),部分分布(15%,64%),辺縁(30%, 55%),陰性(67%,100%)であった.孤在細胞の染色態度の割合(悪性%,良性%)は,貯留(67%,9%),顆粒状(27%,45%),網状(64%,82%), ICL(82%,0%),外分泌(61%,45%),細胞質内不均等(24%,9%),辺縁(12%,18%),陰性(73%,82%)であった.

ERCP 細胞診の感度は,パパニコロウ(pap)染色のみでは 53%であるのに対し, pap 染色+ Al-G 染色では 88%であった.

【考察】粘液染色態度は良悪性で特徴がみられた.悪性では不均等分布集塊や ICL が高頻度にみられたが,良性では不均等分布集塊はほとんど認めず, ICL は全く認めなかったため,良悪性鑑別の有用所見と考えられる.

Al-G 染色は主に粘液と核の染色であるため,粘液産生像や核所見,細胞配列も観察しやすく,また炎症細胞等による重積の影響を受けにくい点より感度が向上したと考えられる.

膵腫瘍の 9 割は膵管由来で,5 年生存率 10%未満と低く,早期診断が望まれる. EUS-FNA は感度が高い検査であるが,実施困難な症例や上皮内癌には ERCP 細胞診が重要となる.しかし, ERCP 細胞診の感度は文献的報告では 5 割前後と低い.今回の検討で 9 割近くの感度を示したことから, Al-G 染色所見の追加により,膵細胞診全体の早期診断が期待される.

【まとめ】膵細胞診における Al-G 染色は,細胞観察をより容易にするだけでなく,粘液染色態度により良悪性鑑別にも有用である.

(連絡先 0236347117)